

大人はどこに消えた?

昨日の続きが今日で、今日の続きに明日が来るように、子どもが大人になるのが当然と思えた時代は、幸福だったのかも知れない。肉体的な話ではない。どこかで線を引けるものではないけれど、子どもの「文化」と大人の「文化」が、あいまいになりつつあるのが今ではないか。同じ時代を共有する子どもと大人は、共鳴し、お互いを映し合う。子どもの「文化」を手がかりに、今の日本を考えてみる。

鏡の中の「子ども」

①

人気、年齢差なし

やはりこの数字には圧倒される。かたや1千万部、かたや100万人以上。「ハリ・ポッター」の単行本3巻の合計部数と、「千と千尋の神隠し」の観客動員数だ。

11歳の魔法使いの少年が主人公のファンタジーと、10歳の少女が主役のアニメの人気は、今年も衰えない。「子ども」はどのよう



元気に遊ぶ子どもたち。東京都世田谷区の羽根木公園で、御堂義乗氏撮影

てい無理な数字。あらゆる年齢層に受け入れられている」という両関係者の話には、素直にならずける。「ルビは魔物って感じがしてるんですよ」。文芸評論家の斎藤美奈子さん(45)はこんな話を持ち出した。児童文学の特徴の一つだったルビ。「昨年、トーマンのベストセラー・リストで、10位までは宗教関係とゲー△関連本を除けば、すべて翻訳本。その中の、『チーフはどこに消えた?』は絵入りの寓話仕立て。『ハリ・ポッター』『十二番目の天使』はファンタジー風で、ルビつきです」

数年前からそんな傾向があった。売れた『少年H』『五体不満足』だから、あなたも生きぬいて『もそう。ルビって大人も子どもも読んで大丈夫よ、というメッセージを出してる気がする。20年前のベストセラー・リスト(81年)には田

あいまいな境界

漫画誌の世界でも同じようなことが起こっている。昨年暮れ東大が発表した東大生のよく読む雑誌の調査で、情報誌に次いで2位は『少年マガジン』。同誌の野内雅宏編集長は「中・高校生をメインと考えて作ってますが、大学生や大人の読者がかなりの部分を占めている。中学ごろから読み始め卒業しない人が多い」。同じ調査で89年のトップは少年漫画誌の1クラス上の年齢層を狙った『ビッグコミックスピリッツ』だった。武藤伸之編集長は「20を過ぎると小さな大人として扱われた。大人と切り離されたある独立の存在としての『子ども』が発見されたのは近代だとされる。そんな『子ども』も、就職、結婚など様々な節目を経て、『大人』と認められ、また『大人』になろうとした。「今や、子どもから大人へ渡る区切りがともあいまいになってきてます

中康夫、青島幸男、井上ひさし、松本清張、吉行理恵らの著書が並んでいる。

歳々らいを対象に作っているが、20代中盤をピークに30、40代まで広がっている。系列のビッグコミックでは50代まで届きます」。人気のアニメ、単行本、漫画誌。そこから浮かぶのは、大人と子どもが入り交じり、同じような物を楽しんでいる光景だ。「大人と子どもとの境界があいまいになってますよね。自分の中にも、そんな面があるのですね。不自然とは思えないんですが」と、話すのは評論家の岸沢俊介さん(59)。

古来、子どもは、幼児期「ね」。どうして? 「高齢化社会では、人生50年の発想では通じない。精神の深い所で、自分をどう生き伸ばせるかという自己調節機能が働いているのではないかと。若い時の関心領域を手放してしまうと困るでしょう。長く楽しむため、大人の部分を少し先取りしもある。両者が重なるあわいの部分がどんどん増える。

情報の優位、消滅

情報の問題が大きい、と考えるのは、社会学の橋爪大三郎・東工大教授(53)だ。大人と子どもの基本関係を親子とみる。親は子どもに、成長の過程で言葉や、生きるための技術を手渡していく。昔、親は最大

の情報源だったから、子から見て人生の何周か先の走者、大人に見えた。「が、学校とメディアの発達で、子どもの情報量を膨大に増やし、情報源としての親に破壊的作用を及ぼした」

だれでもアクセスできる電子メディアの発達、大人と子どもの情報差をも取り払う。子どもが優位に立つことも可能だ。「子どもは、内心、親をからかいの対象にしながら、かわいそうだから黙っている。親は子どもを理解しようと、子どもの世界に近づき、時に夢中になったりする」。ここで子どもが大人化、大人が子ども化する。

純真で、目標や夢に向かって突き進むのが子どもの理想像の一つだ。「千と千尋」「ハリ・ポッター」の主人公と、きれいに重なる。それが、これほど人々を引き付ける理由は――。現実にはそんな子が簡単に見つからないから? それとも、そんな部分に共感できる自分を慈しみたいからか。(四ノ原恒憲)

遠山文部科学相「学びのすすめ」

学力維持に異例の注文

遠山文部科学相は十七日、児童生徒の学力向上策を訴えるアピール「学びのすすめ」を発表した。表向きは、四月から実施される学校完全五日制と学習内容大幅削減の学習指導要領の「趣旨徹底」。だがその内容は、教科書を超える指導や補習・宿題の奨励など、高まる学力低下の不安に学校が真剣に対応するよう求めた異例の注文だった。有効な処方せんになりうるだろうか。(小松 夏樹)

「学びのすすめ」で示された5方針

- ①きめ細かな指導で、基礎・基本や「生きる力」をつける
- ②発展的な学習で、一人一人の個性に応じ子どもの力をより伸ばす
- ③学ぶ楽しさを体験させ、学習意欲を高める
- ④学びの機会を充実し、学ぶ習慣を身につける
- ⑤確かな学力向上のため特色ある学校づくりを推進



識者の声

百塚寛明・お茶の水女子大教授(教育社会学)は、今回「学びのすすめ」は、「こんな小手先の修正では、不十分。画一化した日本の学校現場には、大胆な『自由化』が必要だ」との努力せよ、というのは責任転嫁だ。国として、ゆとり路線転換の必要性を素直に認めるべきだ(手厳しい)。「地域や学校」とのばらつき、格差が大きくなりすぎ、現場は混乱する。国は公教育の水準を確保する義務があり、そのための人や財源の手当てはある程度均質にすべきだ」と話す。

一方、「高卒資格検定の新設」などを提言してきた橋爪大三郎・東京工業大教授(社会学)は、「学力低下」の問題を訴えてきた西村和雄・京都大教授(経済学)は、「教科書のあり方を見直すことなどはなかなか自由化」が必要だ」との

「学校格差広がり混乱」「自由化」もっと必要 「実情に合わせて柔軟に」

意見。「クラス一斉授業をやめ、学校に実質的な権限を移すなど、教育制度を根本から見直す必要がある。個人の違いや理解力に合わせて授業を進める柔軟さがなければ、子ども

の学習意欲も育たない」と指摘する。四月から実際に実施される新要領に、教師や親は、どう対応すればいいのか。教育評論家の尾木直樹さんは、「現場はすでに来年度のカリキュラム作りに入っていて、アピールの内容をすべて反映させることは物理的にも無理」としたうえで、「各学校の実情に合わせて、アピールの内容を柔軟に取り入れればいいのか」と話す。

現場の声

今回の遠山文科相のアピールを、現場の教師らはどう受け止めているのか。神奈川県内の公立小学校の男性教諭(55)は、「来年度から本格的に始まる総合学習の授業研究や、完全週五日制に見合う時間割の作成作業がよ

は、完全週五日制に対応するため、運動会の練習時間を減らすなどして教科の時間を確保する予定だが、補習や教科書の内容を超えた授業にまでは手が回らないのでは」と不安を隠さない。一方、東京練馬区の区立小学校の女性教諭(50)は、「教科書の内容だけでなく、基礎・基本の一部も切り捨てざるをえないと心配している」として、「教科書の内容を超えた授業の奨励を歓迎。ただ、クラスや学校によって子どもの学習進度に大きな差が出かねない。それは保護者や子どもから『不公平』不信を招く懸念を示した。

加藤紘氏、進退示さず

喚問不可避 離党促す声

事務所前代表逮捕

自民党の加藤紘二元幹事長は8日夜、東京都内の加藤派事務所で記者会見し、前事務所代表が所得税法違反容疑で逮捕されたことについて、「政治的、道義的責任が強くある」としたうえで、野党が求めている証人喚問については「公の場での説明(一番重要なのは国会の場での説明責任だと思う。国会の決定に従いたい」と語った。離党などの進退については示さなかった。小泉首相が喚問を容認する考えを示すなど与党内で「喚問やむなし」との声が強まっており、喚問は避けられない情勢になった。

(56面)会見要旨など、2・34・35面に関係記事

決まらぬ進退 政治力学の操り人形／議員辞職し退場を

作家の高村薫さんの話 加藤さんは、共和事件の時にもお金にまつわる問題があった。いろいろな問題が出ては消えていくが、覚えている人間もいる。将来の総理・総裁とまで言われた人が、事

「ここに至っても自分の出処進退を決められないというのは、この人が結局、時々の政治力学の操り人形でしかなかったことを示してはいないか。一昨年の「加藤の乱」の時もそうだったが、加藤

さんには歯切れの悪さを感じる。日本が大変なときに、こんなことで政治が進まないのが一番歯がゆい。 橋爪大三郎・東京工業大学教授の話 小泉首相は、世論の支持を味方に

党内力学に逆らう政治手法。一方、加藤氏は資金集めのうまい金庫番を握るなど、昔ながらの派閥政治の流儀だ。同じ「YKK」でも、首相の1周遅れを走っている感じがする。記者会見も

中途半端、ついつい出処進退の苦手な人だと思える。前事務所代表を信頼していた。これは私の責任だ」と、派閥の會長も、自民党も、何なら議員もすっぱり辞めて、政治の勉強をしてい

ればいい。そちらの方がまだ先の芽があるのでは。 金子勝・慶応大学経済学部教授の話 監督不行き届きだったと認めらば、自ら責任をとるべきだ。国民の政治に対する不信感をこれだけ強めておいて、「秘書がやったことだから知らない」「では許されない。離

党は当然、潔く議員を辞職し、退場すべきだ。金融不安など課題が山積しているにもかかわらず、議員個人にかかわる問題が取りざたされておられ、政策論争がなげかり、政策論争がなげかり、悪者をたたくのは気持ちがいいが、国民もその点を見失ってはいけな

である。核開発や生物化学兵器の配備を認め、監視カメラを外すなどの強硬路線に展。たのもこの目標のため。三日本帝国・北朝鮮は、い赤真珠湾前夜の状況なのだ。北朝鮮にとって、核は自存自衛のため。最大の外交カードでもある。そして過去、外交で核兵器を放棄させた例も、核武装した国家に開戦して降伏させた例もない。対イラクも通って、アメリカも打つ手に轉ずる。 実際に大量破壊兵器を使えば、北朝鮮は破滅だ。だが、使わずに隠すしか生き残る道がない。そして脅せば、アメリカは圧力を強める。危険な駆け引きを暴走させないのが日本の最大の国益だ。 北朝鮮が深刻な危機を感じれば、局面の打開を図ろうと日本国内で細菌や毒ガスをまく小規模なテロに出る恐れがある。これを防止するには警戒を強め、有事法制を整備、日米が反撃して金政権を必ず打倒すると誓言する必要がある。 国交や拉致問題の解決は二の次、三の次にすぎない。 二おわ



拉致家族報道一色た

私生活の加藤

橋爪大三郎さん

東京工業大学教授(社会学者)

た日本は、いま冷静に、国益の優先順位を考えた。より望ましい行動を彼らにとらせ、恒久平和を実現するにはどうしたらいいか。 北朝鮮の核開発が露見して以来、アッシュ政権は金正日政権の打倒を決意したとみるべきだ。94年の核開発時、アメリカは北朝鮮への先制攻撃を警告したが、今回も同様とみてよい。 恨んだ北朝鮮は、日本と関係修復を図った。国交を樹立し、あわよくは援助を獲得して圧力をかわそうとした。この文脈の読めない日本は、危なく乗りかかった。北朝鮮の目標は、金正日政権の現状維持

2002-1-8

特集ワイド

W杯 この盛り上がり

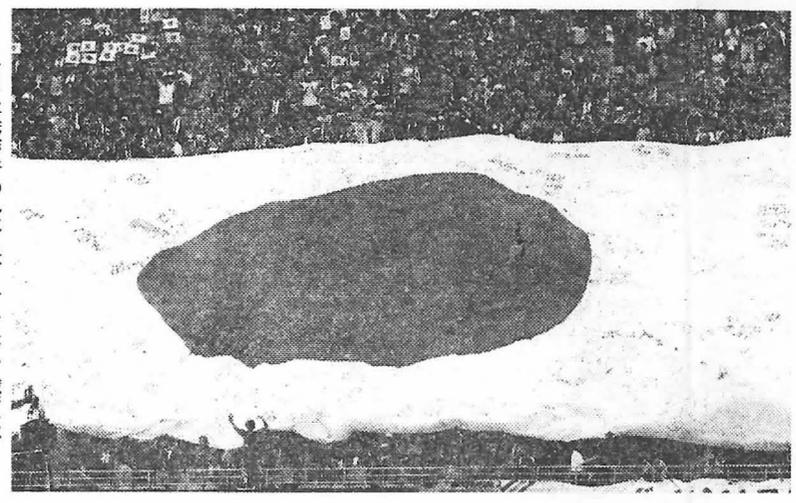


はしづめ・だいさぶろう
1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。専門分野は理論社会学、宗教学、現代アジア研究。著書に「世界がわかる宗教学入門」(筑摩書房)、「政治の教室」(PHP新書)、「その先の日本国へ」(勁草書房)など多数。

東京工業大 橋爪大三郎教授が読み解く

民国家・アメリカはヨーロッパにないルールのスポーツ、バスケットボール、アメリカンフットボール、ベースボールを作らざるを得なかった。それらのスポーツはアメリカ人になるためのイニシエーション(加入儀礼)。どこから来た移民でもアメリカのスポーツをやることによってアメリカ人に生まれ変わる。

アメリカのスポーツはヨーロッパにはあまり広がらなかったが、日本は例外的に野球を受け入れた。それは日本が置かれた状況を象徴している。戦後、日本は経済大国になったが、日米安保体制は続いた。アメリカの影響下にはあったが心の中では「どうもおかしい」と思い続け



14日に大阪で行われた日本・チュニジア戦では、スタンドが巨大な白の丸で覆われた。

てきた。現実主義の親米と心情ナショナリズムの反米というアンビバレントなものが共存していたのだ。
サッカーはそこからの解放感を与えてくれた。アメリカを媒介しないで、世界とつながれるという解放感だ。野球で「W杯」をやっても「アメリカンズ・カップ」になってしまうが、サッカー・W杯は、今回の大会が証明しているようにどこが優勝するか分からない。中心がない。W杯は国際社会のあるべき状態を反映している、ということに日本人が気が付いた。そのW杯が日本で開催されれば解放感が頂点に達しないわけがない。

W杯が始まって地球儀の売れ行きもいそいでいる。
サッカーの特徴は、グローバルゼーションと運動している点だ。人の移動で見ると、サッカー選手は多くはヨーロッパなどのプロリーグでプレーし、ナショナルチームが結成されると国に戻って参加するというパターンだ。プレー先の国の国籍を取得してしまう選手もいる。白人の国のチームだと思っただけに見たら、黒人選手や混血の選手がいる。サポーターも東のはずれの島国まで大勢やってくる。試合は世界に同時中継されて何十億という人が見る。世界中の人が見るからスタンドが燃え上がり、選手は頑張る。マスマテアやインターネットのような情報環境が可能にした世界的お祭りだ。W杯を見ることで、グローバルゼーションの進展と避けたがさが絶対的感覚として受け止められる。

W杯とナショナリズムの関係はどう考えますか。
「日本人だ」という感覚が続いていけばナショナリズムだ。私は元に戻ると思う。ナショナリズムの再構築は必要だとみんなが思っているから、ワールドカップ・ハイ、ともいえる高揚感を生んだのだろう。しかしナショナリズムの再構築は、歴史を見直したり、経済を立て直したり、個々人が新しい動き方を見つけたらいい。ねばり強い、地道な努力の先にあるものだ。W杯ごときで新しいナショナリズムが生まれるわけがないと思う。

ナショナリズム？ お祭りの高揚感だ

W杯ではどの国も出場した以上、自分の国に誇りを持ち全力を尽くすのは当たり前だ。そこにはきちんとルールがある。すなわちW杯には、参加各国がナショナルに振る舞っていいというコンテキスト(文脈)がある。その文脈の中では「過去の歴史」といったものが相対化さ

れ、日本のナショナリズムも韓国のナショナリズムも普通の国の普通のナショナリズムになった。お互いの国のナショナリズムの盛り上がりを見守って見ている、という非常に珍しい光景が生じた。
——石原慎太郎東京都知事は「国家や民族を考えるよい機会だ」と言っていました。
◆ナショナリズムとの関係で、W杯が象徴的に意味するのは戦争だ。例えば、日本とロシアの対戦は「日露戦争」になぞらえられた。
戦争には、国民が一つの目標を共有して一致団結し、一体感と連帯感を受容するという作用がある。高揚感やハイな感覚をもたらす。そのような感覚を本物の戦争のように武器を使って戦うことなく、味わえるのがW杯だ。でもたかがサッカー、政治的文脈がないので国中が安心して、日の丸を掲げ、君が代を歌い、「ニッポン、バンザイ」と叫ぶことができる。

しかし、全く政治的でないからこそ、逆に政治的文脈も生じてくる。つまり「日の丸や君が代」には議論があったが、選手も国民もそれらを喜んで受け入れたじゃないか。「新しい日本人が生まれた」という議論が可能になる。
——そのような議論についてはどのように考えますか？
◆言い過ぎだ。たかがサッカー、実はお祭りだ。昔は年に1、2回、地域でお祭りが行われた。お祭りの時は無礼講、みこしをかついで暴れまわった。要するにフリーガン状態になっていた。ところが今、日本人はお祭りを失っている。都会では1年中お祭りのようでもあるし、そうでもない。ハレ(晴れ)とケ(曇)がない。お祭りの目的は感激することなのに、感激がない。感激がなければ、いくらおいしいものを食べても、カラオケでスポットライトを浴びようと何か満たされない。

そこに現れたのがW杯という疑似戦争。待ちに待った全国民のお祭りだ。特にハレとケのない都会の人が敏感に反応した。自宅でも一人、テレビ観戦するのではなく、見ず知らずの人と一緒に同じチームを応援する。これこそ、お祭りの高揚感だ。

サッカー・ワールドカップ(W杯)はベスト4が決まり、大詰めを迎えようとしている。日本チームの健闘以外にも、国民全員がサポーターになってしまったような盛り上がりは予想以上だった。その盛り上がりから、何を読み解くことができるのだろうか。東京工業大の橋爪大三郎教授(社会学)に語ってもらった。
【山田道子】

なぜ盛り上がったのでしょうか。
◆サッカーは日本人にとって新しいスポーツだ。日本ではなかったのはなんといっても野球だが、野球は六大学野球も含め学校野球。今や学校そのものへの嫌悪感がまん延している。丸刈り、全力疾走、先輩後輩関係などは学校の管理の象徴だ。プロ野球も、巨人が必ず優勝にからみ、セ・リーグが優位でなんとなく序列がある。このような野球が体現する「日本株式会社」「護送船団方式」みたいなものに日本人は飽きていた。

ところが、サッカーは、ヨーロッパのプロチームで日本人選手が活躍する余地が無数にあり、Jリーグでも各国の選手がプレーしている。所属集団を抜け出して、個人の実力が認められ名誉と報酬が得られる世界が当たり前になっていく。もちろんW杯もある。そういうのっていいじゃないか、と日本人は気がついたのだろう。
——サッカーがはやった理由は他にもありますか。
◆アメリカからの脱出だ。移

住の自由が、日本人にとって重要な要素だ。日本ではなかったのはなんといっても野球だが、野球は六大学野球も含め学校野球。今や学校そのものへの嫌悪感がまん延している。丸刈り、全力疾走、先輩後輩関係などは学校の管理の象徴だ。プロ野球も、巨人が必ず優勝にからみ、セ・リーグが優位でなんとなく序列がある。このような野球が体現する「日本株式会社」「護送船団方式」みたいなものに日本人は飽きていた。

今の日本に欠けているもの

——顔に日の丸を描いた人がいっぱいいた光景も初めてでした。
◆日の丸のフェースペインティングは、お祭りの時の顔の白塗り、サポーターが着ていた青いユニホームはお祭りの装束、法被と同じだ。みんなが同じ格好をしてフェースペインティングまでしてしまう光景は初めてかもしれないが、実は、お祭り

と考えると日本人は十分理解できるものなのだ。

——ベスト8には進出できず、敗退したが、日本チームは進歩したようです。
◆従来、日本チームは三浦知良選手というスタープレイヤーが一人で活躍しているイメージがあった。その時にはW杯には参加できなかった。その後、トルシエ監督がやって来た。日本の風俗習慣に無知だから、今までのシステムを壊した。自分のポリシーに基づき、強力なリーダーシップを発揮した。小野伸二や

中田英寿という個性的な選手も半信半疑でそれに従った。日本チームが決勝トーナメントに進出できたのは、「強力なリーダーシップ」と「ストラテジー(戦術)」と「個々人の献身」がそろったからだ。三つとも今の日本に欠けている。だからこそ、試合を見ていて楽しくないわけがない。「政治も経済もこうだ」といいたくはない。
——ナショナリズムはどうなるのでしょうか？
◆お祭りには内容がない。そして終わる。終わった後も「同

中田英寿という個性的な選手も半信半疑でそれに従った。日本チームが決勝トーナメントに進出できたのは、「強力なリーダーシップ」と「ストラテジー(戦術)」と「個々人の献身」がそろったからだ。三つとも今の日本に欠けている。だからこそ、試合を見ていて楽しくないわけがない。「政治も経済もこうだ」といいたくはない。
——ナショナリズムはどうなるのでしょうか？
◆お祭りには内容がない。そして終わる。終わった後も「同

中田英寿という個性的な選手も半信半疑でそれに従った。日本チームが決勝トーナメントに進出できたのは、「強力なリーダーシップ」と「ストラテジー(戦術)」と「個々人の献身」がそろったからだ。三つとも今の日本に欠けている。だからこそ、試合を見ていて楽しくないわけがない。「政治も経済もこうだ」といいたくはない。
——ナショナリズムはどうなるのでしょうか？
◆お祭りには内容がない。そして終わる。終わった後も「同

第3種郵便物認可

問われる「公共」のあり方

長野県知事選を前に

橋爪 大三郎
東京工大教授
(社会学)

長野県知事選が15日に告示され、田中康夫前知事を含めての選挙戦がスタートする。県議会による不信任決議という異例の事態がもたらした選挙が、日本の政治風土でどのような意味をもつか、社会学者の橋爪大三郎氏に分析してもらった。

就任から失職するまでの一年八カ月あまり、田中康夫知事の政治姿勢が一貫していることに、私は強い印象を受ける。

自らを「長野県の『パブリック・サーヴァント』」と規定し、「現場主義の実践」を進めた。どの村にも足を運び、幾度も車座集会を開いた。「ようこそ知事室」

「どこでも知事室」など県民の声に耳を傾ける機会を増やし、「情報公開・説明責任・住民参加」が……ごく当たり前のことになる社会を実現しようとした。ここまですべて徹底して、民主主義の手続きを重視した知事はいなかった。

田中知事のアイデンティティは、政策そのものより、その手法にある。田中氏の政治手法を、テレビと戯れる『知事タレント』と評する人びとがあるが、私はそうは思わない。たしかに田中氏はテレビやメディアに慣れているが、その限界もわかっている。だから車座集会で、県民と直接に言葉を

交わすことを重視するのだ。車座集会の田中知事は、とにかくよくしゃべる。そして、植林の間伐からスキー場の赤字、通学区の問題まで、どんな質問にも丁寧に答える。政治の基本が、言葉のやりとりだということをや、よくわかっていて、ここまで民主主義の「デュー・プロセス」「正当な手続き」にこだわるのは、革命的なことだと私は思う。

香山リカ氏は、かつて田中氏が作家として著した『いまときどき当な料理店』という本に注目する。雑誌の取材費でなく、自腹で客となったレストラン・ガイドだ。『自腹主義の田中氏の、真つ当感覚』が、従来型の政治システムと衝突したのだと、香山氏は診断する(『論座』9月号)。

天野祐吉氏は、県議たちが信濃毎日新聞ほかに出した意見広告を、『コンクリート人間と腕コンクリート人間の対立』と評する(『広告批評』8月号)。一方的

な言葉の押しつけである意見広告に対して、つねに批判にさらされる記者会見や車座集会。対極的なふたつの姿勢だ。

「腕タム宣言」で公共工事の見直しを進めた田中氏のバックボーンは、「公共」とはこういうものだという新しい信念だと思う。税金を使った政府や自治体の活動は、「公共」と呼ばれる。だが「公共」の実質は、ふつうに生活し税金を納める人びとである。県民の意思から遊離するならば、税金を使った活動もはや「公共」のものではない。金の流れ、言葉の流れを、県民の意思にもと

づいて組み直そうというラディカルな試みが「腕タム宣言」であり、「腕記者クラブ宣言」である。言葉のフロである作家の本性が、ここに生きていると思う。

田中氏の目に、これまでの政治は、なるべく納税者の意思から距離をとり、そこに権力のうまみをひき出そうとするものに映った

に違いない。田中氏は、この距離を縮めようとした。これまで政治にとつて田中知事は、戦慄的で稚拙とも言える政治手法「ファシスト」にほかならなかつた。

不信任された田中知事は失職を避け、出直し立候補する。有権者まで支持されるのか、私は注目している。

人生のページ

最初に仲間を弔った人類は、ネアンデルタール人であると言われる。

動物は、仲間が死んでも、弔ったりしない。人類は死者を追悼してきた。それは、文化の不可欠の一部である。どんな社会の人びとも、生命を尊び(殺人を罪とし)、かけがえのない個性を大事にする(家族を

も、弔ったりしない。人類は死者を追悼してきた。それは、文化の不可欠の一部である。どんな社会の人びとも、生命を尊び(殺人を罪とし)、かけがえのない個性を大事にする(家族を

戦争の死者を どう追悼するか

□□下□□

愛する)。だからこそ、死者は死んだのちも、人びとのあいだで生き続ける。戦争の死者も、追悼しなければならぬ。

戦争は、逆説的な出来事である。二つの集団が、利害と存続をかけて対立しあう。敵を殺すことは正しい。敵に殺されることも正しい。平時とは逆転した世界

政治ではなく思想の「宿題」

戦争の死者を弔うということ

正統性・普遍性もたせ

あげた制度である。この制度に、どのような特徴と問題点があったのか。靖国神社の問題を最終的な解決に向けて考えていくために、これらを理解してみよう。靖国神社は、明治維新そ

橋爪 大三郎



はしづめ・だいさぶろう 一九四八年、神奈川県生まれ。東京工業大学教授。社会学専攻。構造主義を踏まえた「言語派社会学」を構想、時事問題にも積極的に発言して

る。そして、死者を祀る仏教の儀式(仏壇や墓所)とは無関係に、すべての死者を祀る儀式をつみ出し、すべての死者からなる仮想的な共同体(英霊)を創作する。このためには神道が、仏教と同列の「宗教」であってはならない。日清、日露の戦争を経て、靖国神社は、このような目的にかな

い。著書に「言語ゲームと社会学論」(ウイットゲンシュタイン・ハート・ルーマン)、「天皇の戦争責任」(共著)、「世界がわかる宗教社会学入門」など。

戦争の死者を祀ると言えば、わが国ではまず、靖国神社がおもい浮かぶ。明治政府がそれ以前の慣習と無関係に、明治初期につくり

た。このやり方では、明治維新の途上で斃れた死者たち(国事殉難者)は、家ごとと宗派ごとを祀られてしま、国家として哀悼の儀式を行うことができなかった。はしづめ・だいさぶろう「非宗教施設」として定めたのは、国家としての哀悼の儀式をつくり出し、国民という実体を存在させ、「公共的なもの」を機能させるためだった。それにはまず、神道と仏教を分離す

る。著書に「言語ゲームと社会学論」(ウイットゲンシュタイン・ハート・ルーマン)、「天皇の戦争責任」(共著)、「世界がわかる宗教社会学入門」など。

われた。けれども、神道の儀式と「英霊」の観念は残った。この観念にもとづいて、しかも戦後憲法と民主主義の原則に従って、靖国神社の「英霊」をどう哀悼するか。これが極めて大きな問題であることは、よく理解できよう。

冷静に考えるなら、解決はつぎのようではありえない。日本国民が、過去の戦争の死者(国事殉難者)を哀悼する、新しい儀式をつくりあげる。その儀式は、靖国神社の「英霊」をそこに解消(解消であった、否定ではない)できるほどの、正統性と普遍性をもたなければならぬ。それは、墓苑でありえず、宗教施設でありえない。このような儀式を、構想できるか。これは、政治の問題ではなく、思想の問題である。そして、日本国民に課せられた「宿題」だ。

